

梶原忠裕『教会学校12ヵ月』を読み解く

塩野和夫
梶原忠裕

はじめに

戦時下にあつて女性3名以外には礼拝に集まる会員もなく伝道もできず、伊予吉田教会の閉鎖を相談された宇都宮充牧師（当時の四国教区教区長）の返事はこうであつた。「教会はやがて来る平和な時代には栄える。しかしもしその時に、火種がなかつたならばどうなるだろうか。教会は燃えることができないのではないか。だからやがて来る伝道の時のために火種になってほしい」¹⁾。

「平和な時代に教会は栄える」。この言葉から現代の日本社会をどのように考えればよいのだろうか。『日本基督教団年鑑 2015』によると、1994（平成6）年度と2013（平成25）年度の日本基督教団の統計結果（1994年度・2013年度）は以下の通りである。変化が少ないのは教会数（1,721・1,716）と現任教師数（2,181・2,054）で、減少しているのは信徒総数（205,306・174,695）と日曜礼拝出席者数（60,802・53,512）である。それらと比べて、著しい減少が認められるのはCS（教会学校）出席者数（27,348・14,102）である。

思いがけず梶原忠裕氏より『教会学校12ヵ月』（43頁）をいただいたのは2015年4月である。「教会学校で聖書のお話をするようになって、今年（2015年）でちょうど30年に」²⁾なる機会にまとめられた1冊である。彼が所属している日本基督教団福岡渡辺通教会は、『日本基督教団年鑑 2015』によると2013年度の礼拝出席者数が47名であるのに対して、教会学校生徒出席者数平均は6名で

1) 塩野和夫『日本キリスト教団 伊予吉田教会90年史』92頁

2) 梶原忠裕『教会学校12ヵ月』43頁

ある。梶原氏によると、「近隣のキリスト教系学校の生徒出席で多い時もある」。「しかし、生徒が1名の場合も」あり、「分級は行われていない」。

福岡渡辺通教会においても教会学校が厳しい状況におかれているのは間違いない。その中であって、『教会学校12ヵ月』は何を語りかけているのか。「私自身が信仰の革新へと導かれる体験の連続です³⁾」と証しされている説教集は、子どもたちに向かって何であることができるのか。

1 『教会学校12ヵ月』の構造分析

『教会学校12ヵ月』の概観を得るために2種類の構造分析を行う。第1は第1部と第2部に分けられている12回の説教の分類である。第2は12回の説教そのものの構造分析である。

(1) 説教の分類

12回の説教は「第1部 イエス様の誕生、受難、復活」（6回）と「第2部 イエス様のおはなし」（6回）に分けられている。これらはいずれも福音書をテキストとした説教であるが、選択に当たっては筆者の意図が影響していると思われる。要するに第1部は福音書が記すイエスに関する物語であり、第2部はイエスが語りかけた物語である。

「第1部 イエス様の誕生、受難、復活」のタイトルと聖書箇所以下の通りである。

11月のおはなし	イエスの誕生が予告される（ルカ1章26-38節）
12月のおはなし	イエスの誕生（ルカ2章1-7節）
1月のおはなし	神殿で献げられる（ルカ2章25-35節）
2月のおはなし	ベタニアで香油を注がれる（マルコ14章1-9節）
3月のおはなし	ペトロ、イエスを知らないと言う（マルコ14章66-72節）
4月のおはなし	復活する（マタイ28章1-10節）

3) 梶原忠裕、前掲書、43頁

「第2部 イエス様のおはなし」は以下の通りである。

- 5月のおはなし 地の塩, 世の光 (マタイ 5章13-16節)
- 6月のおはなし 4人の漁師を弟子にする (マタイ 4章18-22節)
- 7月のおはなし 突風を静める (ルカ 8章22-25節)
- 8月のおはなし 金持ちの男 (マルコ10章17-22節)
- 9月のおはなし 「ぶどう園と農夫」のたとえ (マルコ12章1-12節)
- 10月のおはなし イエスは良い羊飼 (ヨハネ10章7-16節)

(2) 説教の構造分析

12回の説教について構造を分析する。ここで注意を要するのは分析対象が構造であって、内容ではない点である。なお、本文の場所を明示するために項目ごとに頁数と行数を記した。

i) イエスの誕生が予告される (ルカ 1章26-38節)

- ①導入 — テーマの開示 (4頁1行目~6行目)
- ②テーマの解説 (7行目~5頁7行目)
- ③内容の展開 (8行目~6頁5行目)
- ④補足 (6行目~15行目)

ii) イエスの誕生 (ルカ 2章1-7節)

- ①導入 — テーマの開示 (7頁1行目~4行目)
- ②テーマの解説 (5行目~8頁8行目)
- ③内容の展開 (9行目~9頁15行目)
- ④補足 (16行目~10頁6行目)

iii) 神殿で献げられる (ルカ 2章25-35節)

- ①導入 — テーマの開示 (11頁1行目~4行目)
- ②事例の紹介 (5行目~12頁4行目)

③内容の展開（5行目～13頁12行目）

④結び（13行目～14行目）

iv) ベタニアで香油を注がれる（マルコ14章1 - 9節）

①導入 - テーマの開示（14頁1行目～2行目）

②事例の紹介（3行目～15頁3行目）

③事例の解説（4行目～11行目）

④解説2（12行目～16頁8行目）

⑤結び（9行目～10行目）

v) ペトロ，イエスを知らないと言う（マルコ14章66 - 72節）

①導入 - テーマの開示（17頁1行目～2行目）

②事例の紹介（3行目～19頁1行目）

③事例の解説（2行目～9行目）

④解説2（10行目～20頁10行目）

⑤結び（11行目～13行目）

vi) 復活する（マタイ28章1 - 10節）

①導入 - テーマの開示（21頁1行目～22頁3行目）

②テーマの解説（4行目～14行目）

③内容の展開（15行目～23頁7行目）

④補足（8行目～14行目）

vii) 地の塩，世の光（マタイ5章13 - 16節）

①導入 - テーマの開示（24頁1行目～9行目）

②テーマの解説（10行目～25頁9行目）

③解説2（10行目～26頁9行目）

④結び（10行目～13行目）

viii) 4人の漁師を弟子にする（マタイ4章18-22節）

- ①導入 — テーマの開示（27頁1行目～8行目）
- ②事例の紹介（9行目～28頁9行目）
- ③事例の解説（10行目～29頁1行目）
- ④内容の展開（2行目～11行目）
- ⑤結び（12行目～14行目）

ix) 突風を静める（ルカ8章22-25節）

- ①導入 — テーマの開示（30頁1行目～4行目）
- ②事例の紹介（5行目～31頁7行目）
- ③事例2（8行目～15行目）
- ④結び（16行目～32頁5行目）

x) 金持ちの男（マルコ10章17-22節）

- ①導入 — テーマの開示（33頁1行目～15行目）
- ②テーマの解説（34頁1行目～11行目）
- ③テーマの展開（12行目～35頁15行目）
- ④補足（16行目～36頁8行目）

xi) 「ぶどう園と農夫」のたとえ（マルコ12章1-12節）

- ①導入 — テーマの開示（37頁1行目～9行目）
- ②テーマの展開（10行目～38頁5行目）
- ③テーマの解説（6行目～16行目）
- ④結び（17行目～39頁4行目）

xii) イエスは良い羊飼いか（ヨハネ10章7-16節）

- ①導入 — テーマの開示（40頁1行目～2行目）
- ②テーマの解説（3行目～11行目）

- ③展開（12行目～41頁10行目）
- ④展開2（11行目～42頁2行目）
- ⑤結び（3行目～13行目）

(3) 『教会学校12ヵ月』の概観

『教会学校12ヵ月』の概観を得るために、2種類の構造分析を行った。そこから、どのような概観を得ることができるのであろうか。

まず、「説教の分類」からである。12回の説教は明らかに性格の異なる第1部（6回）と第2部（6回）に分けることができる。「第1部 イエスの誕生、受難、復活」はイエス自身に関する出来事を扱う。イエスを主人公とするこれら6回の説教は、タイトルに見る限り出来事性を持つ。「第2部 イエスのおはなし」はイエスのたとえや彼の振る舞いを扱う。聖書学で認められているように、イエスは教理を教えたのではなくたとえで物語られた。この事実からすると、第2部も出来事性を備えた物語となる。したがって、第1部と第2部では事柄に関する性格の違いはあっても、「イエスについての」あるいは「イエスが話された」物語性を尊重していることが分かる。

次に12回の説教の構造分析であるが、大きく2つの様式に分けることができる。第1のパターン（i）ii）vi）vii）x）xi）xii））では「①導入—テーマの提示」に「②テーマの解説」が続く。第2のパターン（iii）iv）v）viii）ix））では「①導入—テーマの開示」に「②事例の紹介」が続く。②に「テーマの解説」か「事例の紹介」という違いはあるが、いずれにしても明快な構造を用いて語られている。このような分析結果は30年という長期にわたって教会学校の説教に取り組みられてきた結果だと考えられる。

したがって、構造を分析した結果、『教会学校12ヵ月』の概観として「イエスに関わる物語が明快な構造を用いて語られている」と言える。

次に内容の考察である。

2 内容の分析

構造に続いて内容を分析する。明快な構造にどのような内容が盛り込まれているのか。量的にすべての説教を対象にすることはできない。そこで、第1のパターン、すなわち「①導入ーテーマの開示」に「②テーマの解説」が続く説教を第1部と第2部から1つずつ取り上げて分析する。同様に第2のパターン、「①導入ーテーマの開示」に「②事例の紹介」が続く説教も1つずつ取り上げて、内容を分析する。

(1) 第1の様式の内容

第1のパターンからは「11月のおはなし イエスの誕生が予告される（ルカ1章26-38節）」と「5月のおはなし 地の塩、世の光（マタイ5章13-16節）」を取り上げて、内容を分析する。

i) 「11月のおはなし イエスの誕生が予告される（ルカ1章26-38節）」の内容

①導入ーテーマの開示

「マリアさんはどんな女性だったのでしょうか」と問いかけ、ルカ1章26-27節によってテーマが開示される。

②テーマの解説

「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」という挨拶を、「不思議な挨拶ですね」と問いかけてテーマの解説をしている。マリアの驚きを受けて、「まだ結婚もしていないのに、どうしても子供が生まれるなどと言うのでしょうか」と問いかけ、「神にはできないことは何一つない」（ルカ1章37節）と結ぶ。

③内容の展開

「今日の個所の最初（26節）にあった『6ヵ月目』というのは」と説教の内容を展開させ、エリザベトさんの物語に入る。さらに「信じられない話ですが」と展開させて、マリアの祈り「そうなりますように」へつなぐ。その

上で、「イエス様のお誕生には、そのようなマリアさんの信仰がありました」とする。

④補足

「一つ付け加えておきたい」として、ヨセフさんの物語を紹介する。その上で、「イエス様のお誕生には、母マリアと父ヨセフの信仰、すなわち「神は我々と共におられる」という信仰がありました」。したがって、「私達も『神様が共におられる』ことを信じ、イエス様のお誕生をお祝いするクリスマスを迎えたい」と結んでいる。

ii) 「5月のおはなし 地の塩、世の光（マタイ5章13-16節）」

①導入ーテーマの開示

「今日の聖書の個所は」という導入によって、テーマである聖書の言葉「あなたがたは地の塩、世の光である」が示される。

②テーマの解説

「地の塩、世の光」を解説するために、「イエス様がそのように言われた『あなたがた』とはどんな人たちでしょうか」と問いかける。結びでは意外性を秘めて「生まれた土地の故に差別されてきて、貧しく病気に苦しむ人達……『地の塩、世の光』と呼ばれたのは、このような人達でした。とても立派な人達とは見えなかったと思います」と語りかける。

③解説2

テーマを重ねて解説して、「すでに現在のあなたがたはそうなのだとされています」と語る。その上で、「差別され、貧しく病気に苦しんでいるあなた達こそ『地の塩』『世の光』なのだ、とイエス様は言われます。何故でしょう」と問いかける。問いに答えて「あなたがたが差別され、貧しく、病気に苦しみ、悲しい思いをしてきた中で、『わらをもすがる』気持ちでイエス様の前に立つ時、あなたがたは世を照らす光として輝いている」と結ぶ。

④結び

結びで「私達一人一人にも言われているのでしょうか」と呼びかけ、「私達

も、神様に『よし』とされて、イエス様から『地の塩』『世の光』であると言われているのです」としている。

(2) 第2の様式内容

第2のパターンからは「1月のおはなし 神殿で献げられる（ルカ2章25-35節）」と「6月のおはなし 4人の漁師を弟子にする（マタイ4章18-22節）」を取り上げる。

i) 「1月のおはなし 神殿で献げられる（ルカ2章25-35節）」の内容

①導入ーテーマの開示

「みなさんは、クリスマスが何の日かわかりますね」と呼びかけ、「神様の御子イエス様がこの世にお生まれになった喜びをお祝いする日ですね」とテーマを開示する。

②事例の紹介

「今日の聖書の箇所にも、イエス様のお誕生をお祝いする人が出てきます」とテーマを受けて、「エルサレムの町に住むシメオンという人です」と事例を取り上げる。さらにシメオンについて「シメオンさんは『主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない』とのお告げを聖霊から受けていた人です」と説明する。

③展開

シメオンについて「聖書はさらりとしか書いていませんが、おそらくシメオンさんのそれまでの人生は、心痛む辛いものであったでしょう」とした上で、展開する。「シメオンさんの人生はずっと、親しい人達が、尊敬する人達が、愛する人達が、目の前で殺されていくのを、何もできずにただじっと見続けるだけの人生でした。だからこそ、『イスラエルの慰められるのを待ち望み』、『主が遣わすメシアに会うまでは』決して死ぬわけにはいかない…。そこへ皆殺しになったはずの赤ちゃんの姿で、救い主がシメオンさんの目の前に現れたのです」と語りかける。

④結び

「世界中でシメオンさんのように辛い思い、苦しい思いをしている人達がいっぱいいます。そのような人達の上に、クリスマスの喜びの訪れをお祈りしましょう」と結ぶ。

ii) 「6月のおはなし 4人の漁師を弟子にする（マタイ4章18-22節）」

①導入ーテーマの開示

「イエス様が4人の漁師（ペトロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネ）をお弟子さんとして招き、4人はイエス様に従ったというお話です」と導入でテーマが開示される。

②事例の紹介

テーマを受けて、「この日も（のちにペトロと呼ばれる）シモンさんと弟のアンデレさんが、湖で網を打っていました。そこへイエス様がやって来られて、2人が漁をしているのを眺めました」と事例が紹介される。

③解説

4人の漁師について解説される。「貧しいガリラヤ地方でも、漁師というのは特に蔑まれていた職業のようです。……慰労困憊しただけでなく、家族の生活の心配、不安、焦り、絶望、そういった気持ちがシモンさん達をおそったのではないかと思います」と説明する。

④展開

イエスによって新しい展開がもたらされる。「ペトロさん達は、本当はよく訳もわからないまま、イエス様に従っていったのではないのでしょうか。「しかし、イエス様の招きは、ペトロさん達の信仰の強さとか、頭の良さとか、身分の良し悪しとか、そのような資格のあるなしを問題にしません」と内容を深める。

⑤結び

そこで、「私達も、今はまだイエス様のことがよくわかっていなくても、聖霊の導きを信じて祈りたいと思います」と結ぶ。

(3) 内容の分析

i) 第1の様式の内容分析

第1の様式からは「11月のおはなし イエスの誕生が予告される（ルカ1章26-38節）」と「5月のおはなし 地の塩、世の光（マタイ5章13-16節）」の内容を見た。そこでこれらの説教に認められる内容を分析する。

「11月のおはなし」の「①導入—テーマの開示」は聖書の物語をテーマとしていて、具体的にはマリアである。同様に「5月のおはなし」の「①導入—テーマの開示」も聖書の言葉をテーマとしていて、具体的には「地の塩、世の光」である。

「②テーマの解説」で「11月のおはなし」では2度の問いかけを用いて、マリアによるイエス誕生に導いている。「5月のおはなし」では問いかけへの答えに意外性を持たせて、差別・貧しさ・病気を「地の塩、世の光」を結び、聖書のメッセージを語りかけている。

「11月のおはなし」の「③内容の展開」ではやはり「信じられない話ですが」と意外性を秘めながら、マリアの信仰を導いている。「5月のおはなし」の「③解説2」では「なぜでしょうか」と問いかけ、差別・貧困・病気・悲しい思いを持ってイエスの前に立つ時、「あなた方は世を照らす光として輝いている」としている。

「11月のおはなし」の「④補足」ではヨセフさんの物語を補足して「神様が共におられる」クリスマスを語っている。「5月のおはなし」の「④結び」では私達もイエス様から「地の塩、世の光」と言われていると結んでいる。

ii) 第2の様式の内容分析

第2の様式からは「1月のおはなし 神殿で献げられる（ルカ2章25-35節）」と「6月のおはなし 4人の漁師を弟子にする（マタイ4章18-22節）」の内容を見た。これらの説教に認められる内容を分析する。

「1月のおはなし」の「①導入—テーマの開示」はクリスマスである。「6月のおはなし」では4人の漁師である。

「②事例の紹介」として「1月のおはなし」ではシメオンを登場させ、「6月のおはなし」では「シモンさんと弟のアンデレさん」を紹介している。

「1月のおはなし」の「③展開」ではシメオンのこれまでの苦しく、つらく、耐え難かった人生を紹介し、「だからこそ」「主が遣わすメシアに会うまでは」死ぬわけにはいかないとする。「6月のおはなし」の「③解説」では「貧しいガリラヤ地方でも、漁師というのはとくに蔑まれた職業のようです」と説明し、さらに「④展開」でイエスの招きはこの世的なあらゆる価値観を問題にしないことを明らかにする。

「④⑤結び」で「1月のおはなし」では辛い思い、苦しい思いをしている人達に「クリスマスの喜びの訪れをお祈りいたしましょう」と結び、「6月のおはなし」でも「イエスさまのことが」分からなくても、聖霊の導きを信じて祈りたい」としている。

おわりに

梶原忠裕『教会学校12ヵ月』の分析を構造と内容において試みた。その結果、構造の分析によって得られた「イエスに関する物語が明快な構造を用いて語られている」が、内容の分析によって詳細に明らかになった。

まずテーマに関してである。第1の様式におけるテーマは「マリア」あるいは「地の塩、世の光」であり、いずれも聖書における主題であった。同様に第2の様式におけるテーマも「クリスマス」と「4人の漁師」で、やはり聖書における主題である。次いで説教の構造である。第1の様式の場合、「②テーマの解説」で聖書のメッセージが語られ、その後の展開においても聖書の指針から外れることはない。第2の様式の場合には事例としてシメオンあるいはペトロとアンデレが紹介され、その後は聖書的な観点から両者の見方を説明してメッセージへとつないでいる。

このように説教は聖書の物語で一貫しているが、子どもに語り聞かせる工夫はどのようになされているのか。ここで注目されるのが、繰り返し用いられる

問いかけと意外性である。これらは子どもたちの関心を引くために有効な手段として機能している。それに対して、子どもたちの日常生活が話題として取り上げられることはない。おそらくこれは連続して教会学校に通っている生徒が少なく分級も行えず、そのために子どもたちとの日常的な対話を行うことができない結果だと考えられる。

このような分析結果から梶原忠裕『教会学校12ヵ月』は聖書のメッセージそのものの語りかけによって子どもたちに語りかけていることが分かる。それは梶原が「おわりに」に書いていた内容に通じる⁴⁾。

教会学校でお話をさせていただくということは、私自身が信仰の革新へと導かれる体験の連続です。聖書のお話を準備する時は、自分にとって、ずいぶん勉強になってきました。

自らが「信仰の革新へと導かれ」、「ずいぶん勉強になってきました」学びを通して語られる聖書そのもののメッセージが子どもの心に届くことを祈らざるを得ない。おそらくこれは日本の多くの教会が現場において抱えている課題に違いない。

4) 梶原忠裕『教会学校12ヵ月』43頁